

「残したい！大阪とその周辺の自然」に寄せて

大阪自然環境保全協会会長 夏原由博

「大阪には自然がない」——そう嘆く声を聞くことは少なくありません。確かに、これまでに急激な都市開発によって多くの緑が失われ、大阪は全国でも有数の「自然に乏しい府県」の一つとなりました。かつて身近にあった里山や水辺はコンクリートに覆われ、生き物たちの声は遠のいてしまったように感じられます。しかし、目を凝らし、足元を見つめ直せば、私たちの暮らすこの大阪とその周辺には、まだかけがえない素晴らしい自然が息づいています。

私たち大阪自然環境保全協会は、残されたこれらの自然を守り、未来へつなぐために活動を続けてきました。自然保護の道のりは、決して平坦ではありません。例えば、木村さんが書いているように堺市南部の丘陵地における残土処理計画に対する活動やスポーツ施設が計画された信太山丘陵の保全。これらは、市民の声と行動が貴重な自然を救った、希望の光といえる事例です。しかし、私たちの目の前には夢洲における自然再生や生駒市高山の自然保護など新たな課題も横たわっています。

このような状況の中で、私たち自然保護・調査研究部は一つの問いを投げかけました。「今、私たちが本当に残したいと思う自然はどこにあるのか」。行政や国が選定する基準とは別に、市民の視点で、生物多様性の高い貴重な場所から、日々の散歩道にある愛おしい風景まで、会員が「残したい」と願う自然をリストアップすることにしました。

ここに紹介する 50 の場所は、どれも単なる「自然スポット」ではありません。それぞれに固有の歴史があり、地域の暮らしと結びついた文化があり、何より、そこを愛し、守り続けてきた市民の存在があります。能勢の栗園や湿地、北摂の里山、淀川のヨシ原、南河内の河川敷、さらには埋立地からよみがえった干潟や草原まで、自然のあり方は多様であり、守り方もまた一つではありません。長年の観察を続ける人、草刈りや竹伐りを担う人、子どもたちに自然の魅力を伝える人、行政と交渉を続ける人……自然を守る営みは、地域の数だけ形があります。

ページをめくれば、それぞれの場所で保全活動に汗を流し、その土地を深く愛する人々による解説が並んでいます。歌垣の栗の古木や能勢の湿地を守る人、都会のオアシスである大阪城公園や鶴見緑地で生き物を観察する人、泉南の干潟やアマモ場で海の豊かさを伝える人——。ここにある文章は単なるガイドブックの解説ではありません。それぞれの場所で、「この自然を失いたくない」と願い、行動する人々からの熱いメッセージであり、現場からの報告書です。

さらに私たちは、国際的に広がりつつある「ネイチャーポジティブ」の理念を活動に取り入れています。これは単に自然を守るだけでなく、失われた自然を再生し、人と自然が共に豊かになる未来を目指す考え方です。大阪の干潟や里山での再生活動、都市公園での生物多様性回復の取り組みは、その実践例といえます。自然を減らさないだけでなく、むしろ増やしていくという挑戦が、次世代へ誇れる大阪を築く力になるのです。

本書を通じて、皆様に知っていただきたいことがあります。それは、大阪にもこれほど多様で豊かな自然が「まだ」残されているという事実です。そして同時に、それらの多くが、人の手が入らなくなることによる荒廃や、開発による消滅の危機に常にさらされているという現実です。

私たちがこのリストを作成した最大の目的は、これらの自然が開発によって失われる前にその価値を把握し、計画をいち早くキャッチして守り抜く仕組みを作ることです。自然は一度失われれば、二度と元には戻りません。しかし、私たちが関心を持ち「残したい」と声を上げ続けることで、変えられる未来があります。

どうか本書を手に取り、紹介された場所へ足を運んでみてください。そして、そこの空気を吸い、生き物の気配を感じてください。皆様一人ひとりが「残したい自然」を見つけ、その想いを共有して下さることが、大阪の自然を次の世代へ引き継ぐための最初の一步となります。この冊子が、愛すべき大阪の自然を守るための道標となることを願ってやみません。